

ひかりと いのちのなかま

光寿院住職 酒生文弥

仏教の哲理をこれからの 安全保障に取り入れましょう！

世界中で軍事予算が膨張し、諸国民の間に敵対心や危険な対決が増してきていて、私たち一般市民はとも脅えています。なのにシンクタンクや政府が行っている国際関係に関する議論からは問題の解決策がまったく見えません。

ローマ帝国には「平和を欲するならば戦争の準備をせよ」という格言があったように、こうした残念な現状にあるのは、ひとつには国際関係を欧米型の競争至上モデルを受け売りして論じているからではないでしょうか。

技術や資源をめぐる国民国家の競争を良しとする社会ダーウィン主義、利己主義を美德と説くアダム・スミスの『国富論』なども影響しています。

私は全ての宗教を統一して理解できる原理を完成し、世界平和に仏教が貢献できる役割を研究している僧侶です。アジア全域で知的な議論の共通の基盤である仏教からは、競争と対決による安全保障ではない、もうひとつの視座が拓けてきます。

仏教には欧米シンクタンクが押し立てる「勝

者総取り」モデルを補完できる、いや、ひよっとしたら、欧米モデルに取って替われるだけの哲理があります。

韓国の元駐米大使である洪錫炫さんの著書を最近読み、洪博士は仏教の哲理に精通する優れた知識人であり、『ゴルディオスの結び目』（難解な諸問題。フリギアのゴルディオス王によって結ばれ、これを解く者はアジアを支配すると予言された結び目。アレクサンダー大王が剣で両断した）を仏教で解きほぐすことができるという大胆な提案をされたことを知りました。真の国際平和というゴルディオスの結び目は、ウエストファリア条約も、マキャベリも、クラウゼヴィッツも、キッシンジャーも解けなかった難題です。洪博士は『お釈迦様だったら北朝鮮をどう扱うだろうか？ マインドフルネス外交』で、精神的な次元によって、一見不可能に思えたことを一気に可能にする仏教的な考え方を提唱されています。

昨今の外交は機能不全に陥っています。十分な交渉をしないまま物事を決めようとすればするほど、問題はさらに深刻化しているのです。ウクライナでの戦争や台湾をめぐる紛争は現在未曾有の危機を呈していて、私たちは対処の仕方を土台から間違えたのではないかと案じられます。悲しいことに、地球が統合に向かえるのではと期待されていた時代が、深刻な外交問題と大規模な軍事拡大に至ってしまったのです。

問題の一端は、欧米外交の伝統を十七世紀以来、根本的に支配してきた原理と想定にあるといえます。国際関係の情報を扱う欧米思想の大枠には、ライバル同士の抗争という本質的な原理があります。欧米の外交史には一貫して、一方の側は相手方を打ち負かさなければならず、勝者は戦利を独り占めする、という覇権争いが想定されてきました。

しかし、地球がひとつの共同体となって気候変動など共通の大問題を抱える時代になって、こんな見識は適切と言えるでしょうか？ ホップスは「万人の万人に対する闘争」と言いましたが、私たち人間同士のやり取りはそんな世界観に縛られる必要はありません。

キリスト教の終末思想ドグマの影響が強い従来の安全保障研究では不当に無視されてきました。仏教には対立感に替わる考え方があります。人類の未来はある瞬間に決定されてしまうという仮定に基づいて計画される安全保障政策があまりにも多すぎるのです。

仏教は、「対決」でなく「調和」を強調しながら、相互に連動している世界の外交課題に対して具体的にどう関与したらよいのか、を教えてください。仏教は、人間は常に助けあう存在だといった甘い考えをしている訳ではありません。むしろ、たとえばどんなに困難な状況にあろうと、正しく進んで行ける道があることを洞察させてくれるのです。物事の関係（因縁生起）の二面性や複雑性をありのまま

に観る時（如実知見）、初めて事態を把握できる能力（智慧）が発揮されるとするのです。ユダヤ・キリスト教を母体とする明言さえされていない宗教的な教説を濫用して、単純な善悪観で印象操作をするメディアが氾濫していますが、人間の関係性にはもっと深遠な形があるのです。

外交は容赦ない覇権ゲームであり、調和は自国の行動を正当化するリップサービスの言葉に過ぎないと思われる方も多いでしょう。でも調和こそが外交の最終目的だと設定するとしたらどうでしょう。確かに、調和という理念は欧米の外交史にも無縁ではありません。「欧州の協調」を達成することは歴史的目標で、平和な協働秩序を希求するだけに見えるかも知れませんが、この理念は希望的な寓喩というよりも、小国の問題を大国に利するようにあしらうことの耳ざわりの良い婉曲表現、と理解した方がよいでしょう。ある歴史家は「欧州協調とは、大同土が合意したことに小国を説き伏せて従わせる調和、を意味するに過ぎない」と述べています。

仏教は、国際関係に対するこうした覇権主義的アプローチの効果は、安全保障の確保という点において、威厳ある調和を真摯に希求することにまったく劣っていると捉えます。物事は表面下に深奥な秩序を秘めていて、人間の調和意識には、小さく一步を踏み出すだけで論争の本質を陽転させてしまう力があり

ます。欧米の伝統はチェスに象徴されてきました。チェスがそうである様に、欧米の戦略家は、相手の駒を取って行って最後に王手をかけるといって「ゼロサムゲーム」で考えます。しかし、尊厳意識の強い東洋においては、「共存共栄」の可能性を想定してゲームを行います。中国のチェスである囲碁（日本でも同じ）などアジアのゲームは、敵を容赦なく絶滅させるより、むしろ競いつつもお互いの調和を想定している点で、欧米のチェスとは根本的に異なるのです。チェスは覇権に基づく単純な勝利を想定しています。王将を追いかけてやっつける、それでゲームオーバー。しかし囲碁には勝ち方が何百万通りとあるのです。ハーフハウスで勝つこともまた数百ハウスで勝つこともできます。勝者はいませんが、完全占領の概念などなく、ダンスの様に無数のゲームが可能なのです。

調和と同様、「均衡」という暗喩も欧米型外交では専門用語として長く使われて来ました。十八世紀から二十世紀初頭にかけて「勢力均衡」という概念は欧州列強の国際関係での行動を導いてきました。ある強国やその陣営の台頭を防ぐための努力として、この原則に従って外交が展開され、幾多の同盟と国際理解が変遷しました。しかし追及された均衡の本質は興味深い限定にありました。欧米の均衡アプローチは、確立された列強諸国クラブの狙いと利益だけを認めるために用いられた

のです。強国による支配と植民地の争奪戦の中で、そうでない国や民族は将棋の駒ないし競争の利害関係者として扱われることがしばしばでした。

重ねて、勢力均衡それ自体を望むべき目的とか順守すべき原理とか考える国などなかったという事実から、列強間の均衡は何度も立て直すことが必要でした。つまり均衡とは、ゲームの参加者が密かに抱いている口には出さない目的をそのライバルや敵に達成させないために役に立つ手段だったのです。勢力均衡は、相対的な地位や権力の頂点に立つて他の競争相手の事に決定的な影響力を持つとする野望を牽制しあう手段でした。この点から、このシステムが維持した均衡とは、一方が自分の利益のために均衡を崩させない状況にある間だけ続く不安定なものだったことがわかります。それ自体が大変に価値ある真の均衡、それがもたらす恩恵。それを真剣に求めては来なかったのです。

均衡は仏教では必要不可欠な価値であり、その外交への応用は東アジアに平和の均衡を構築する鍵になりえるでしょう。それを実現することはアメリカ政府の安全保障専門家のほとんどが一顧だにしない目的です。中国との最終対決という見解は、キリスト教黙示録にある悪魔とのハルマゲドンのように、交渉や相互理解に余地を与えない絶対的な謬見です。ロシアや中国またはこの両国とも打ち倒し

心を絶海の孤島に喩えて見ると解りやすいでしょう。あなたの心は、日がな波濤に開まれています。衝撃や侮辱の波であなたの思考が曇ることもあるでしょう。しかし、もし人が殆んど雑念の無い均等で水平な境地に達せられれば、波は静まり大海原は見事に天空を映し出すことができます。心は、感情に掻き乱されない時、驚くべき精度でこの世界を映し出します。事物は留まることなく去来します(諸行無常)。物事に行雲流水の如く対することができるとき、あなたはそれらの真髄を掴みます。エゴ(自我)が語り合いから褪せて行けば、あなたは自分と相手をより客観的に観察できる様になります。

私たちが最も犯しがちな錯誤は、自分たちの執着に気づかず、自分たちが出来事や事象に魅了されていることを見誤り、マインドフルネスに惹かれていることを見落とすことです。

仏教では職業を問わず瞑想することが勧められています。瞑想したらコソド口でさえ腕をあげるでしょう(笑)。要するに、瞑想は価値判断の問題ではないのです。集中と気づきなのです。同じ理由で仏教の実践はどの宗教とも衝突しません。マインドフルネスはキリスト教ともイスラム教とも、とても合います。結局、道徳的な判断とはどう物事を見るかの問題です。

何千年単位を尺度に歴史的に考える場合、

て、体制を替えもしくはトップを消してしまえば勝利する、と単純に考えているのです。しかし、経験知からも解るように、そうしたやり方は必ずしも成功しません。アメリカは中南米や中東に何十年と軍事介入しましたが、どの軍事介入も後に「ブローバック(逆流)」つまり当初の紛争が複雑化したり拡大したりという予期せぬ結末になる恐れがあることが示されてきました。短期的目標を達成できたとしても、調和を無茶苦茶に壊したことで、とりわけその国の庶民に新しい問題を作ってしまうのです。結局、北朝鮮の核武装問題にしても非核化することは大切ですが、その過程が破壊的であるなら、はるかに大きな問題を導いてしまうでしょう。

これまでの間違いをあらためて、マインドフルネス、均衡、気づきを国際関係の重要な目的にしてみてもどうでしょうか？ 外交情勢の局面で辛い思いをしている時、絶望的な状況と考える時、時間を止めて自分の内奥の自己に戻ってみることはとても必要です。瞑想する時間をつくり、自己との平安を感じ、平静を取り戻す時、人生の見通しに奇跡をもたらされる、私はそう感じています。真剣な決断は、自分の心がしつかり落ち着いてから行いましょう。

私たちは、自分の対立者を打ち倒すことを想うよりも、ウィンウィンの達成を想い描けないでしょうか？ 調和それ自体を追及する

出来事や人の行動をある程度俯瞰して見れるようになります。でも、目の前の現実からは遥かに遠ざかってしまつてしまうでしょう。

しかし、今この瞬間に集中して価値判断をするならば、1カ月経ち、1年が過ぎ、或いは10年後には、その瞬間に正しいと思つたことが真逆であったという事になるかも知れません。

仏教はあらゆる国との関係において外交に長期的でバランスの取れた集中力を与えます。

国際関係は進歩させられますが、私たちは常に、仏陀が説かれた「中道」を考慮しなければなりません。すべての参加者をウィンウィンにでき、極端を避けることができれば、私たちは意義ある方途に前進していけます。

もし私たちが、ひとつの見方だけを言い張つて、軍事攻撃に頼つて、特定の争点を強行しようとするなら、すぐに逆流してしまつて一時的な結果以上のものは得難いでしょう。こうした精神に駆られて行為をなせば、何もしない場合よりさらに悪い結果になってしまう可能性がありますが高いのです。

私たち人間は、衝動的な反応、勝者総取りと言う考え、政策目標の安易な変転、などによつて如何に人類共通の大義により深く貢献することを蝕まれてしまうことか。

このことを重々心得ておくことによつて初めて、力ではなく見方の均衡を確立することができ、その確立の過程においてこそ、文字

行為ができれば、それまでは想像できなかった解決策が浮かんで来ることがあります。世界中のご縁がますます緊密に結ばれている今日、危険な対立を避けて調和的な解決策を考えるしかないのです。

仏教で価値ある観念の一つに「無心」があり、私が個人的に実践している大切な心境です。無心とは、「心が無くなる」といった意味ですが、もつと正確に言えば「縛られた思考から解放される」と言うことです。それは心が万物に開放されていて、ある思考や感情に囚われていない状態です。無心な心でいる時、その人はいつでも中立で穏やかで、自己の外側から自己を観ることができます。こうした心の在り方を得ると、その人は様々な偏見や先入観を超えて、相手をありのままに見ることができま

外交から感情を取り除くことから始めましょう。相対する人の言動で癩癩を起こす理由はなくなります。相手は自分の一部ではないのです。どんなに酷い言動を受けようと、それを映し返す「鏡」のようであるべきなのです。鏡はそれが映す映像に苛立ったりはしないものです。映像は去来します。映し出す像、メッセージの変化と行く手を意識すべきです。それから自分自身がすべき干渉的な反応に気づくべきです。この「無執着」を継続できれば、実際の現象、自らの感情的な反応に気づくことができ、「無心」の状態に到達できるのです。

通りの「諸国民の調和」を希求することが可能になるのです。

諸々の宗教は私たち人間に「善であれ！」と説いているだけです。善とはいのちに叶うことです。悪とはいのちに背くことです。いのちを殺すことは邪悪です。一神であれ、多神であれ、ダルマであれ、「至高の存在」は異口同音に「絶対的にいのちのために生きよ」と呼びかけて私たちを祈っておられるのです。

酒生文弥

浄土真宗本願寺派得度(僧籍)
教師(住職資格)頭座(僧侶最高位)

1956年9月8日

福井市篠尾町浄土真宗本願寺派浄福寺
(753年創建)に生まれる

1980年3月31日

早稲田大学政治経済学部卒業

1982年3月31日
(財)松下政経塾(第一期生)修了

1987年3月31日
龍谷大学大学院博士後期課程修了

(仏教学・比較宗教学)
同大学院から昭和59年9月〜昭和60年

8月カリフォルニア大学大学院宗教学
研究科へ文部省奨学生留学

1986年1月〜12月
ニュージャージー州立ラトガース大学
大学院へロータリー奨学生留学